

身近なテレビドラマは「脳死・臓器提供」の理解をどこまで変えるか？

ドラマは「理解と関心」の入り口として極めて有効だが、「当事者意識と行動」を促すには壁がある。

背景と実験アプローチ

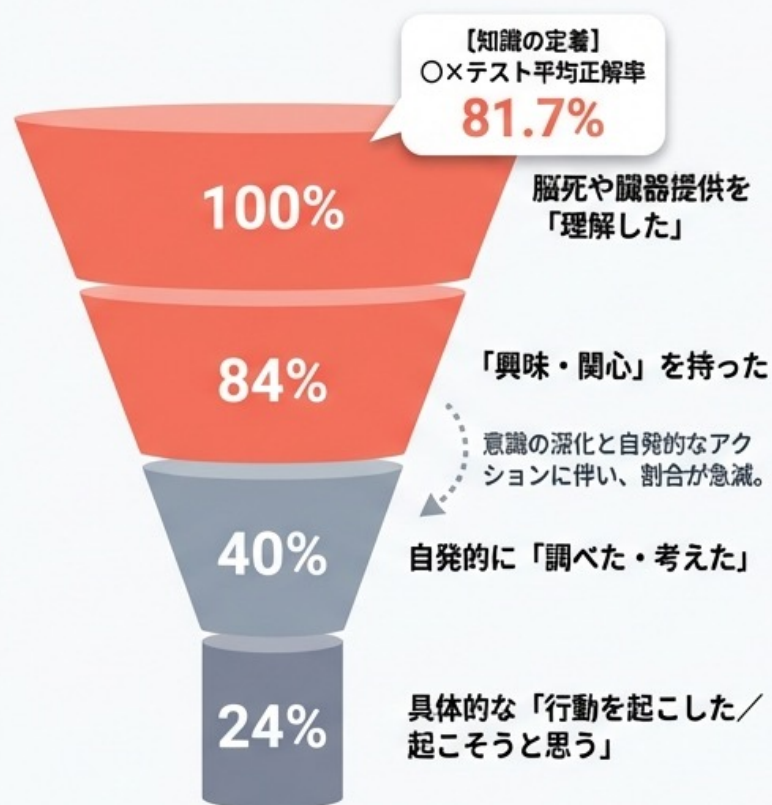


- 課題
臓器移植法改正後も内容が複雑で、適切な理解が不足している。
- 仮説
テレビドラマ等の身近なコンテンツが、複雑な制度を理解する「手助け」になるのではないか？

実験概要

対象：19～58歳の男女25名
内容：脳死臓器提供を描いた医療ドラマ（「救命病棟24時」）を視聴
測定：視聴直後の「〇×テスト」と、3日後の「WEBアンケート」

視聴後の意識変化ファネル



結論と考察



メリット：入り口としての絶大な効果

複雑な制度をわかりやすく伝え、初期の興味を惹きつける力は非常に高い。理解促進のツールとして有効。



限界点：当事者意識の欠如

フィクションであるため現実問題として捉えにくい。「無料で受動的に見られる」という手軽さの裏返しとして、自発的な行動喚起には繋がりにくい。